

## 杜甫『絶句二首 其二』詩小考

—「山青花欲然」の句中における「花」とは—

渡 部 英 喜

### はじめに

杜甫（七一二～七七〇）の代表作の一つに、人口に膾炙する「絶句」と題する作品があり、前半の二句は、「江碧鳥逾白 山青花欲然」江碧にして鳥逾いよ白く 山青くして花然えんと欲す」と詠われている。この聯で詠じられる「花」とはいったいどのような花を指しているのであろうか。杜甫の生きていた唐代は「花」といえば、「牡丹の花」を指している。しかし、この詩が詠われた舞台が蜀（四川省）の成都であることを考えれば、ただ単に「牡丹の花」とみるとわけにはいかない。蜀の花といえば、ツツジの花を指すのが普通であるからである。この作品は杜甫が家族とともに、大飢饉に遭遇して華州（陝西省）での官職を捨て、食を求めて、秦州（甘肅省天水）等を経て、蜀の成都に辿り着き、居を構えた時に詠まれたものである。蜀を代表する花はツツジである。従って、この作品に詠じられた「花」はツツジの花と特定することができるはずである。しかも、わざわざ杜甫は「燃えるような花」と詠うのであるから、ただ単に「ツツジの花」とだけ訳すのは如何なるものであろうか。つまり、この「花」はただ単にツツジの花とするのではなく、具体的に種類まで特定することができるのはいかと思えている。もし仮に、具体的にツツジの花を特定することができるのであれば、果たしてどんなツツジが相応しいのであろうか。本論ではツツジの花を特定することを試みてみたい。

先ず初めに、わが国ではこの「花」をツツジの花と解釈して翻訳している書籍は果たして、何冊あるのだろうか。これまでに上梓されている諸本を繙き、それらを羅列した上で、私見を述べてみたい。

### 一、諸家の「花」に対する解釈について

初めに諸家の訳文を發行順に引用してみたい。

最初は、杜甫の研究者として名高い吉川孝次郎氏と三好達治氏の共著である『新唐詩選』（岩波新書・昭和二十七年八月十日発行）から眺めてみたい。その前半の二句を、

1 わきあがるような新緑の山々、火のような赤さで、あちこちに咲きほこる花、花、花。

と訳し、王維の「輞川別業」の詩を例に挙げながら、花については「桃のであったか」と解説している。続いて、内田泉之助博士の『漢詩百選』（明治書院・昭和三十七年五月二十五日発行）には、

2 新緑の山に点々と咲く花の紅は、燃えるばかりにあざやかで、見るからに美しい春の景色である。

と訳している。次に、目加田誠著、『漢詩大系 杜甫』(集英社・昭和四十年三月三十一日発行)には、

3 山は青緑で花は燃えるように紅だ

と訳されている。次に、前野直彬注解『唐詩選 中』(岩波文庫・昭和五十七年十月十八日発行)には、

とある。次に、前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』(東京堂・昭和四十五年九月三十日発行)には、

4 山は青葉につつまれ、その間に咲いている花は、燃え出すのではないかと思われる程赤い。

とある。次は岩波文庫の松枝茂夫編『中国名詩選 中』(昭和五十九年九月七日発行)には、

9 山の青さに映えて花は燃えんばかりだ。

とある。次に、石川忠久博士が著した『漢詩の世界』(大修館書店・昭和五十年三月十日発行)には、

とある。続いて、松浦友久編『校注 唐詩解釈辞典』(大修館・昭和六十二年十一月一日発行)には、

5 山が青々と茂り、花がパーツと燃えるように咲いている。

10 山は新緑で、そのために花は(いつそう際だつて)今にも燃えあがらんばかりに(赤く)見える。

とあり、続く鑑賞文には「ツツジのような鮮やかな花を考えるとよろしい。ツツジのことを杜鵑花といいますが、杜鵑はほととぎすで、ほととぎすの鳴くころに咲く花ということでしょうが、実はほととぎすという鳥は、蜀の地方の代表的な鳥なので、一名蜀鳥ともいいます。だから、ここでこの真つ赤に燃える花をツツジと考えるのは、根拠のないことではありません」として、花の名をツツジと指摘している。次に、拙著『漢詩雑話』(昭和堂・五十六年十二月二十五日)では、

6 山は青 花燃えたつよう

11 山はあさみどりに、その中に真紅の花が燃えんばかりに咲いている。

と訳している。続いて、服部南郭・日野龍夫校注『唐詩選国字解』(平凡社・昭和五十七年三月十日発行)には、

とある。次に、石川忠久著『NHK漢詩をよむ杜甫』(日本放送出版協会・昭和六十三年十月一日発行)には、

12 山の木は緑に映え、花は燃え出さんばかりに真つ赤である。

とある。次に拙著『黄河漢詩紀行』（東方書店・平成元年十二月十日発行）には、

13 山は 青々と 花は 燃えんばかりだ

と訳す。次に、鎌田正・田部井文雄監修『研究資料 漢文学 詩2』（明治書院・平成六年一月二十四日発行）には、堀江忠道氏の口語訳が掲載がされている。それには、

14 山（の木々）は、あおみどり色で、（その中に咲く、）花は 燃える

と訳されている。続いて、石川忠久著『漢詩をよむ 春の詩一〇〇選』（NHKライブラリー・平成八年三月二十日発行）には、

15 山の木々は緑に映え、花は燃えるように赤い。

とあり、続いて、亀山朗著『風呂で読む 続唐詩選』（世界思想社・平成十年二月十日発行）には、

16 山は新緑、その中に混じる赤い花は、いまにも燃えだしそう  
うだ

と訳されている。次に、志賀一朗先生の『漢詩の鑑賞と吟詠』（あじあブックス・大修館書店・平成十一年六月一日発行）には、

17 山は青くして花は燃えんばかりに真っ赤である。

という口語訳を試みている。次に紹介する松下緑訳『漢詩七五訳に遊ぶ「サヨナラダケガ人生カ」』（集英社・平成十五年二月十日発行）には井伏鱒二調に、

18 ミドリノ山ニサツキモエ

とあり、また、その文庫本の『漢詩に遊ぶ』（平成十八年七月二十五日発行）はカタカナをひらがなに替えて、

19 みどりの山にさつきもえ

と初めて、「花」をサツキと具体的に訳している。サツキとはツジの一種のサツキツジのことである。次は黒川洋一著『杜甫』（角川文庫・平成十七年三月二十五日発行）には、

20 山はさみどりに、花は燃えんばかりだ。

とある。次に引く、竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』（岩波書店・平成十八年五月二十五日発行）には、

21 山青く 花燃えんとす

と訳され、語釈に「花は桃の花」とある。また吉崎一衛氏の『漢詩の旅 長江』（明治書院・平成十八年七月二十五日発行）には、

22 山は青々として、花が燃えあがらんばかりに赤い

ある。次に、拙著『心になごむ 漢詩フレーズ108選』（亜紀書房・平成十九年七月十五日発行）には、

23 山は新緑に覆われて青く

躑躅の花は真つ赤に燃えださんばかり

A群は「花」とだけ、B群は具体的に「桃か李の花」とし、C群は「ツツジ(サツキを含む)」と分類している。それをもう一度纏めてみると左記の通りになる。

という訳を試みた。次に、宇野直人著『NHK古典講読 漢詩 杜甫』(日本放送出版協会・平成十九年十月一日発行)には、

A群 ただ単に「花」とだけ訳しているものには、

24 山は青々と新緑につつまれて、その中に咲く花は燃え立つように赤い。

- 1 あちこちに咲きほこる花、花、花。
- 2 咲く花の紅は、燃えるばかりにあざやかで、
- 3 花は燃えるように
- 4 咲いている花は、燃え出すのではないか
- 5 花燃えたつよう
- 6 花は紅なが火の燃ゆるやうに見ゆる
- 7 燃えるように紅の花が開く
- 8 燃えんばかりだ。
- 9 花は燃えんばかりだ。
- 10 花は(いつそ際だつて)今のも
- 11 真紅の花が燃えあがらん咲いている。
- 12 花は燃え出さんばかりに真つ赤である。
- 13 花は 燃えんばかりだ
- 14 (その中に咲く、)花は燃える
- 15 花は燃えるように赤い。
- 16 赤い花は、いまにも燃えだしそうだ
- 17 花は燃えんばかりに真つ赤である。
- 18 花は燃えんばかりだ。
- 19 花が燃えあがらんばかりに赤い
- 20 その合間合間に咲く花は燃えるように赤い。
- 21 咲く花は燃えるように赤く咲いている。
- 22 いまにも花が咲き誇ろうとしている。

として、「第二句の『赤い花』は桃か李であろう。」という解説がなされている。次に、宇野直人・江原正士『杜甫』(平凡社・平成二十一年二月十日発行)には、

25 春の山は青々と木の緑に包まれて、その合間合間に咲く花は燃えるように赤い。

とあり、石川忠久監修『NHK新漢詩紀行ガイド4』(日本放送出版協会・平成二十二年七月三十日発行)には、

26 山は青々と茂り、花は燃えるように赤く咲いている。

と訳されている。最後に、村山吉廣氏の『書を学ぶ人のために 唐詩入門』(二玄社・平成二十二年八月二十日発行)には、

27 山は青く澄み、いまにも花が咲き誇ろうとしている。

とある。以上、手持ちの二十七冊の書籍を発行順に口語訳を引用し、掲載してきたが、結局は三グループに分けることができる。つまり、

B群 桃の花か、李の花と訳したもの(鑑賞・解説文を含めて)に

21 花燃えんとす

24 その中に咲く花は燃え立つよう

C群 ツツジ(サツキを含む)の花と訳したものは、

5 花がパッと燃えるように咲いている。

18 ミドリノ山ニサツキモエ

19 みどりの山にさつきはえ

23 躑躅の花は真つ赤に燃えださんばかり

以上、三つのグループに分類できたが、圧倒的に多いのはA群のただ単に「花」と翻訳しているものであり、二十七冊中二十一冊も占めて、全体の八割弱にも達している。具体的に花名を示しているのは六冊(B群及びC群)のみで全体の二割強である。その中で、花名を桃(或いは李)としたのは二冊、ツツジ(サツキを含む)は四冊である。桃の場合は全体の七パーセントであり、ツツジの場合は全体の十四パーセントに過ぎない。桃などと解釈したのは旧暦二月に咲く桃の花が中国を代表する春景色であると考えたからであろう。確かに、桃の花は中国を代表する春景色に違いない。しかし、それは江南地方の春景色を指しているのであり、杜牧(八〇三〜八五二)の詠う「千里鶯啼緑映紅に映ず」(江南の春)の影響であろう。この詩の「緑」は柳の新緑であり、「紅」は桃の花を指すのであるが、この先入観が桃(或いは李)という解釈に繋がったものであろうと推測する。では蜀(四川省)の花は何を指しているのであろうか。

## 二、蜀の花とは何を指しているのか

碎葉スチャブ(キリギス・トクマツク)で生まれ、五歳から二十代半ば頃まで、蜀の青蓮郷(四川省江油市)で育った李白には、蜀を偲んで詠じた作品が残されている。その作品とは旅の途中で、宣城(安徽省)で詠じた「宣城にて杜鵑の花を見る」という作品である。それには、

宣城見杜鵑花(宣城にて杜鵑の花を見る) 李白

蜀国曾聞子規鳥 蜀国曾て聞く子規の鳥

宣城還見杜鵑花 宣城還た見る杜鵑の花

一叫一廻腸一斷 一叫一廻腸一斷

三春三月憶三巴 三春三月三巴を憶ふ

多感な青少年時代に二十年間も過ごした青蓮郷は故郷と考えてもよいだろう。その李白が他郷の宣城で眺めたのは杜鵑花である。この花は杜鵑(子規ともいう。ほととぎす)の鳴く頃に満開になるツツジである。また、かつて聞いたことのあるホトトギスの鳴き声を聞いて、故郷を思い出し、感慨を催して、七言絶句に詠んだのだろう。杜鵑は蜀の国に多い鳥で、別名蜀鳥ともいう。また、郫県の郫城の南郊には望帝叢祠がある。この祠は古代の蜀の国王・杜宇と開明の二王を祀ったものである。杜宇は民に農を教え、開明は治水を教えたとされる伝説上の名君であり、人民に慕われて祀られている。

杜宇には、民に農業を促したという言い伝えがあり、国王の位を宰相に禅譲して出国し、後に帰国して復位を望んだものの、復位は叶うことはなく、恨みを抱きつつ、血を吐いて死んでしまい、その杜宇の魂の化身が杜鵑になったという伝説が四川省には残されている。蜀ではツツジとホトトギスには深い因縁がある。従って、ツツジが蜀を代表する花ということが理解できよう。石川忠久先生が「真つ赤に燃える花をツツジと考えるのは根拠のないことではありません」(『漢詩の世界』大修館書店)という指摘はそういうところからきているのである。

## おわりに

蜀の花はツツジである。しかし、ツツジには多くの種類があり、そ

の種類まで特定することは難しいが、牧野富太郎著『原色牧野植物大図鑑』(北隆館・昭和五十七年五月二十日発行)を繙いてみると、

付記 絶句の平仄を示しておきたい。

つじ科には「ツクシシヤクナゲ」を始め、「アズマシヤクナゲ」「ハクサンシヤクナゲ」「ヒカゲツツジ」「バイカツツジ」「ゴヨウツツジ」「ムラサキヤシオツツジ」「アケボノツツジ」「ミツバツツジ」「皐月ツツジ(サツキ)」「リュウキユウツツジ」「レンゲツツジ」

江○	山○	今○	何○
碧●	青○	春○	日●
鳥●	花○	看●	是●
逾○	欲●	又●	帰○
白●	然◎	過●	年◎
○平字	◎韻字		
●仄字			

(仄起式・下平声一先の韻)

等々多くの種類が記載されている。この中でも、蜀でのツツジはレンゲツツジが有力な候補ではないかと思われる。なぜならば、レンゲツツジは蜀の山野に最も相応しい花であるからである。四川省の省都・成都は我が国の鹿児島とほぼ同緯度であり、中国の西南部に位置する温暖な地方にある。省内には大きな河川が四本も貫流しており、大地は常にしっとりとしている。特に秋から冬にかけての朝方は、大地が濃霧にすっぽりと包まれて、太陽は昼近くまで顔を出すことはないのである。「蜀犬日に吠える」とは、蜀の気候・風土を端的に言い表している俗諺である。そんな風土・気候に適しているのがレンゲツツジなのである。水温の十分な高原や山野に生えるレンゲツツジは四川省の風土に合った植物である。また、春から初夏にかけて咲く花の多くは黄色や橙色の色を付ける。杜甫の詠う「花燃えんと欲す」とは、燃えるような赤というイメージではない。火の勢いが強く、よく燃えている様子を観察してみると、上部は黒みを帯びた赤色であるが、炎の中心は橙色か、黄色である。従って、燃えるような花とは、真っ赤な花ではなく、橙色を帯びた黄色の花である。「黄」の字源は「矢の先に箆を付け、その箆の中に火を付けた火矢の形」である。従って、燃えるような花とは真っ赤な花ではなく、黄色味を帯びた橙色である。杜甫が詠う「燃えるような花」とは、蜀の風土にあう中国原産のレンゲツツジであり、漢名・羊躑躅をさすのである。